

ティーチングポートフォリオ

山村学園短期大学 子ども学科

専任講師 巢立佳宏

1. 教育の責任

群馬医療福祉大学における 2019 年度の担当科目は（表 1）の通りである。

（表 1）2019 年度 担当科目詳細一覧

科目名	学期	対象学年	種別	受講数	備考
保育内容（健康）	後期	1 年	演習	23 名	1 学年 教員 1 名
保育の表現技術 I（体育）	前期	1 年	演習	23 名	1 学年 教員 1 名
社会的養護 I	前期	2 年	講義	40 名	1 学年 教員 1 名
社会的養護 II	後期	2 年	講義	40 名	1 学年 教員 1 名
基礎演習 I	通年	1 年	講義	59 名	社会福祉学部 教員 4 名
保育実習 I（保育所）	通年	3 年	演習	31 名	1 学年 教員 5 名
保育実習指導 I（保育所）	通年	3 年	演習	31 名	1 学年 教員 5 名
保育教職実践演習	後期	4 年	演習	40 名	1 学年 教員 4 名
保育実習指導 II（保育所）	前期	4 年	演習	40 名	1 学年 教員 4 名
幼稚園見学実習（フィールドワーク）	通年	1 年	演習	23 名	1 学年 教員 2 名 単位外科目
幼稚園子どもと英会話	通年	1 年	演習	23 名	1 学年 教員 2 名 単位外科目
ボランティア活動	通年	1 年	講義	108 名	1 学年 社会福祉学部、 短期大学部合同 教員 6 名

チームケア入門Ⅰ	集中	1年	演習	108名	1学年 社会福祉学部、 短期大学部合同 教員6名
----------	----	----	----	------	-----------------------------------

山村学園短期大学における2020年度の担当科目は（表2）の通りである。

（表2）2020年度 担当科目詳細一覧

科目名	学期	対象学年	種別	受講数	備考
キャリアアップ セミナー	通年	1年	演習	18名	1クラス 教員4名
保育入門	後期	1年	演習	20名 高校生	1クラス 高大連携 教員2名
社会的養護Ⅰ	後期	1年	講義	73名	4クラス 教員1名
保育の心理学	前期	1年	講義	73名	4クラス 教員2名
乳児保育Ⅰ	前期	1年	講義	73名	4クラス 教員1名
保育・教職実践 演習（幼稚園）	後期	2年	演習	66名	4クラス 教員4名
基礎演習	通年	1年	演習	18名	4クラス 教員4名
実習指導Ⅰ	前期	1年	演習	73名	4クラス 教員5名
実習指導Ⅱ	後期	1年	演習	73名	4クラス 教員5名
実習指導Ⅲ	前期	2年	演習	66名	4クラス 教員5名
保育実習Ⅰ	集中	1年	実習	73名	4クラス 教員2名
施設実習Ⅰ	集中	1年	実習	73名	4クラス 教員2名
施設実習Ⅱ	集中	2年	実習	66名	4クラス 教員2名

教育実習 I	集中	1 年	実習	73 名	4 クラス 教員 2 名
教育実習 II	集中	2 年	実習	66 名	4 クラス 教員 2 名

## 2. 教育の理念

私が以下の3つのキーワードを教育の理念としている。

### (1) 実践現場へつなげる授業

私は子育て支援センターの保育士、児童養護施設の心理士、小学校のカウンセラー、市の教育委員会における巡回相談員など、様々な現場に勤務してきた。しかしながら勤務する中で、知識として理解していても、現場においてはうまく立ち回れず、自身の力不足を感じるが多かった。こうした様々な職場での勤務経験は現在の私の大きな糧となっている。具体的には、実際の現場において単に知識を有しているだけでなく、いかに知識を活用し、柔軟に対応していくかが必要であることを感じた。そのため、保育士幼稚園教諭養成校での教育を実践現場における子どもへの保育・教育に結びつけていくことは意義がある。授業において学生がよりよく理解できるよう具体的な事例を多く使い、様々な子どもへの対応を学生自らが考える授業を展開している。

こうした実践現場での私の経験を学生たちに還元していくことが重要であると考えている。

### (2) 保幼小および地域との連携

私は保育園や幼稚園、小学校、中学校、放課後等デイサービス、児童養護施設、適応指導教室など様々な場所で研修会や事例検討会を行ってきた。特に「埼玉県熊谷市大幡幼・小・中連携保護者会」では幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭、保護者など70名以上の方々を対象に幼児期～青年前期までの子どもの発達、発達障害について講演した。他にも埼玉県熊谷市適応指導教室保護者会における研修会に講師として参加、群馬県みどり市立大間々北小学校の就学時健康診断において保護者の方々に対し「子どもへのかかわり方」をテーマに講演、埼玉県鴻巣市立小谷小学校の職員研修会にて「発達障害児への理解と対応」について講演、埼玉県鴻巣市就学支援委員会に心理士として参加し、市内全域の特別な配慮を要する児童への支援について心理的側面からの助言を行った。そうした中で、多く課題として挙がっていたのが、『情報共有』、『外部機関との連携』である。保育士や教員の多くは非常に熱心で子どもへの対応にはすさまじいエネルギーを有している。一方で、バーンアウトしてしまう保育士、教員も少なくない。

子どもや保護者への支援や援助に困ったときにどのような機関と連携し、問題に立ち向かっていくのか、学生の内から学んでおくことは非常に意義がある。保育士として勤務した後、離職する者も少なくはない。そのため、大学において保育士が様々な社会資

源を活用し、外部機関や地域と連携するための保育・教育について伝えている。

地域との連携の実践例として、2018年度には横浜保育福祉専門学校総合学科夏季公開講座に講師として参加し、高校生を対象に「保育の心理」について講演を行った。また、同年にセーリングワールドカップシリーズ江の島大会において学生を引率し、来場された子どもや保護者に対して、紙コップで作成する“ヨット”を用いて学生の交流を援助した。

2019年度には前橋市まちなかキャンパス講座に講師として参加し、「フラワー曼荼羅ぬり絵～心身の健康と脳の活性化～」を前橋市民に対して実施した。加えて、同年に前橋市七夕祭りに学生引率として参加し、来場された子どもや保護者の方々に対して、学生が演劇やボールプールなどを通して交流することを援助した。他にも群馬県教育委員会主催「高校専門教育研修講座」に講師として参加し、県内の農業高校に勤務する教員を対象に「交流活動における児童生徒理解やコミュニケーションに関する技術や知識2」について講演を行った。

### (3) インクルーシブ保育

発達障害というワードが近年、保育・教育現場だけでなく社会的に話題となっている。私は発達障害を有する、または疑われるような子どもに数多く携わってきた。子どもに対して遊戯療法や箱庭療法などのカウンセリング、ソーシャルスキルトレーニングなど様々な方法を用いて、子どもが保育園や小学校など社会性の求められる場で生活しやすいよう実践してきた。これは単に日常生活における支援ではなく、子どもたちの将来を見据え、いかに生きやすい生活を提供していくものである。「生きる力」を子どもたちが身につけられるよう、適切な支援方法を検討し、提供してきた。

私はこの経験を学生たちに伝え、保育現場で障害を有する子どもたちが生活しやすい社会を実現したい。そのため、学生のうちから発達障害について具体的に理解し、どのような保育・教育を行うべきか学べるような授業を実践している。

## 3. 教育の方法

### (1) アクティブ・ラーニング

私は様々な現場での子どもや保護者、保育士、教職員の方々から学んだことを架空の事例として用い、授業を行っている。例として、架空の事例や映像教材などを用いて、学生一人一人が保育士の立場から、どのような対応を行うか考える授業を展開している。事例問題に関して、学生の内から触れていくことは非常に意義がある。実際の現場では画一的な答えはなく、各々の現場において、答えが異なることが多いためである。授業の講義で得た知識をどのように実践へ落とし込むか、その方法を様々な角度から検討している。こうした検討を繰り返していくことにより、学生が実際の現場においても対応できる力が身につくのである。また、実習などにおいても学生が初めて発達障害な

どの障害を有する子どもと出会うことが多い。そうした際に、学生はどのように対応して良いかわからない。そのため、実習前に障害を有する子どもへの対応や障害の特徴について検討しておくことで、柔軟に学生が対応することができる。

事例問題を解く中で、答えが一つであるとは限らない。そのため、学生と教員の双方向対話型授業を展開している。具体的には事例問題の解答を学生たち数人にマイクを手渡し、発表してもらう。そうして多種多様な対応があることを理解してもらう。また、ステージ上にてロールプレイを行い、視覚的にも理解しやすいよう努めている。特に心理学の実験などをステージ上にてロールプレイを行い説明すると、多くの学生から「理解しやすかった」と授業の感想をいただいた。こうした双方向対話型授業やロールプレイを行うことにより、学生の理解が深まり、体験することで実際にどう対応したらよいか理解できるのである。

## (2) 授業の工夫

授業を始める際には、必ず前回の授業の復習を行っている。前回の配布プリントから問題を作成し、学生たちに前回の授業のポイントについて質問する。双方向型授業を毎回実践している。集団の場の中で発表することが苦手な学生もいるが、問題を簡単にするに加え、近くに座る学生が手助けするよう周知しているため、発表しやすい環境を整えている。

また、具体的な資料や映像を盛り込み、学生の好奇心や学習意欲が持続するようにしている。授業で学んだことがどのように実践で活かせるのかワークシートを活用し、学生一人一人が考える力を身に付けられるような取り組みを行っている。その他に実習などで必須のスキルとなるおむつ替えに関しては実際に人形を用いて学生たちの前で実践し、理解しやすいような授業を展開している。

虐待などの社会的な問題については学生たちの学ぶ意欲が高く、虐待を予防する使命を保育士が担っていることを事例などから理解できるよう説明している。

事例を通して学ぶことで、学生が実際の現場に出た際、どのような対応をするべきかだけでなく、知識として今何を学ぶべきか考えられるような授業を展開するよう心がけている。

## 4. 教育の成果・評価

乳児保育Ⅰの公開授業において、他の教員から「『保育園における感染対策』について①手洗い②おむつ交換③嘔吐時の処理、等を動画を用いて教授する内容であった。動画を観ることで、具体的に保育の現場を想定でき、1年生前期にこのような授業を受ける意義は大きい。また視聴中、学生の様子を見たり個々の質問に答えるため、机間を巡視する方法も、広い場での授業だからこそ必要だと感じた。園によって、動画とは違う感染対策もある、ということも伝授していたので、より具体的な保育者等や乳幼児の姿

を伝えると、さらに学生の学びが深まると思われる。」とコメントをいただいた。

## 5. 教育の改善に向けた今後の目標

### (1) 短期的目標

具体的な事例、ロールプレイ、視覚的教材など様々な方法を用いて、学生がより意欲的に興味を持って授業に取り組めるよう取り組んでいく。

### (2) 長期的目標

#### ① 実習の重要性

実習は学生にとって授業で学んだ知識を実践の場で活かす重要な機会である。授業内での実践を学生たちがどのように活用していくか教員が理解を深め、伝えていく必要がある。学生一人一人について理解を深めていき、指導案の作成や責任実習などきめ細やかな指導を行えるよう努めていく。

#### ② 学生に還元するための研究

私はこれまでの現場経験を学生たちに伝えていくとともに、保育現場でのフィールドワークなどを通して、保育現場での実践や保育現場で求められる大学教育について研究という視点から理解を深めていきたい。

保育現場の状況は日々変化している。時代のニーズに応じた保育士を養成していくためには、現在の実践の場における保育について教員が理解し、学生たちに伝えていく必要がある。

#### ③ 社会の一員としての成長

学生は大学を卒業後、保育士として自ら考え、行動していかなければならない。その基盤となるのは大学での学びである。そのため、現在の学びをどのように現場の中で活かすか理解することが重要である。また社会においては社会的なコミュニケーション力や自身の長所を活かし、短所を補うなどの必要性も出てくる。単に保育士を養成するのではなく、一人の人間として社会で活躍できるような人材を養成していくことも教員の責務であると考えます。そのため、学生が社会の一員として、立派に活躍できるよう手助けしていきたい。

## 6. エビデンス一覧

- (1) 各科目シラバス
- (2) 授業時配布プリント
- (3) 試験問題
- (4) 成績集計結果
- (5) 公開授業アンケート結果

以上